

2022シーズンJMSCA表彰式



山とスポーツクライミング情報誌

登山 月報

JMSCA

登山月報 第647号 令和5年2月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）



イエローバンドのトラバース

8月11日 みんなで山を考えよう!
祝「山の日」
全国「山の日」協議会 山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する

2023年新春懇談会	2
第13回全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会開催レポート	3
2022山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区)報告	5
Enjoy Climbing	7
愛媛県山岳・SC連盟自然保護委員会のSDGsな活動	8
JMSCAで初めてのオリンピックでメダリストを育成した指導者表彰	9
第19回山岳遭難事故調査報告書 その4	9
JMSCA、表紙のことば、編集後記	13

No.647

2023年新春懇談会

日本山岳スポーツライミング協会の2023年新春懇談会が1月14日(土)に東京アルカディア市ヶ谷で、午前中は表彰式、午後は懇談会に分かれて開催された。

今回は、丸会長の挨拶の後、一般社団法人日本パラクライミング協会 共同代表小林幸一郎様から現状の状況について、山岳スキー（以下SKIMOと呼ぶ）の滝沢空良選手と上田綾香選手から、今後の競技について抱負を語るとともに、島徳太郎選手と、平林安里選手がビデオを通じコメントを発表した。その後、表彰に移り、以下のように山岳部門では、日本山岳グランプリ、山岳奨励賞を含め各岳連と、指導委員会からの推薦で合計12名、スポーツライミングでは、日本代表としての活躍が顕著だった12名の優秀選手が表彰された。

表彰式には協会理事の方々のみならず、多くのスポンサー関係者、スポーツライミング部の皆様も参加した。表彰式後には、集まったスポーツライミングの優秀選手たちが各スポンサーの皆様のもとを訪れ、2023年度シーズンの抱負と、目標が語られた。

12時からは顧問・参加会が開催され、歴代会長含め16名の方にご出席いただいた。

13時30分からの懇談会では、やっとコロナ前と同様の立食での懇談会となった。



丸会長、新年の挨拶

亀山副会長の開会の言葉、丸会長が主催者を代表して挨拶した。ご来賓を代表して務台衆議院議員様及び、米山登山研修所所長様よりご挨拶をいただき、顧問4人の乾杯により懇談が開始された。午前中の表彰者に加え、永年参与表彰者14名様も紹介された。

久しぶりの対面での再会に、喜びの声や歓談の輪が広がり、話が盛り上がったようである。まだ、Withコロナ下ではありますが、徐々に閉塞感から解放され、明るい皆様の元気な姿を拝見することができました。次のステージに向けて、登山、スポーツライミング、山岳スキーを発展させるために頑張りましょう。（記 赤尾 浩一）



永年参与表彰



スポーツライミング優秀選手表彰



山岳部門表彰



山野井泰史氏を囲んでの歓談



山岳スキー選手紹介



日本山岳グランプリ受賞者・山野井泰史氏と山岳奨励賞受賞者・野村良太氏

第13回全国高等学校選抜スポーツライミング選手権大会 (HSC2022) 開催レポート

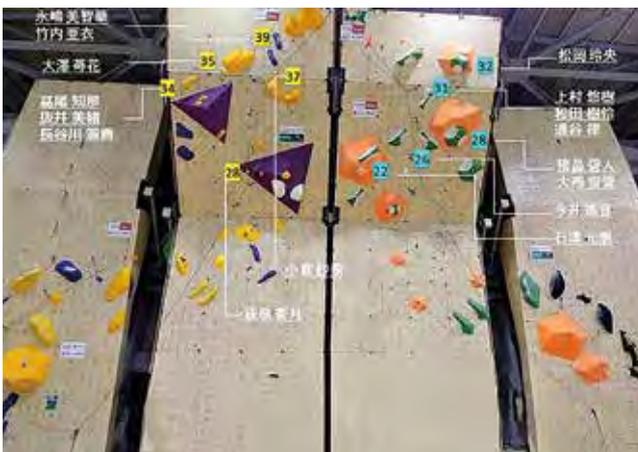
HSC2022 実行委員長 村岡正己

会場：埼玉県加須市民体育館
 期日：予選 2022年12月24日(土)
 決勝 2022年12月25日(日)
 種目：リード
 選手：男子94人(39県) DNS-5、女子88人(36県) DNS-3
 * DNSは、COVID-19感染、降雪による
 来場：12月24日 12月25日
 選手182人(男94女88) 選手53人(男26女27)
 同行者98人 同行者14人
 保護者72人 保護者6人
 スタッフ107人 スタッフ101人
 VIP1人 VIP3人
 メディア1人 メディア3人
 計461人 計180人

新型コロナの感染が第8波を迎えましたが、熱源(ストープ)による上昇気流を利用した換気(第3種レベル)環境を作り、withコロナの体制を引き、昨年の2倍の500人が入場できる体制を設定。



決勝は、男女同時のスタート。加須の広い壁を利用したトラバースのルート。コーディネーションもなくシンプルでリード本来の保持力、持久力が試される感じのルート。(右2面 男子 左2面女子)



永嶋美智華



松岡 玲央

個人表彰

男子							
順位	BIB	氏名	所属		学年	高度	予選
1	M092	松岡 玲央	兵庫	明石南高等学校	2年	32+	5
2	M006	上村 悠樹	東京	上野高等学校	3年	31+	1
3	M061	和田 樹怜	高知	高知追手前高等学校	1年	31+	1
4	M032	通谷 律	佐賀	多久高等学校	1年	31+	8
5	M045	猪鼻 碧人	埼玉	聖望学園高等学校	2年	28+	12
6	M052	大西 蛍雪	神奈川	海老名高等学校	2年	28	16
7	M097	今井 遙音	愛知	緑丘高等学校	2年	26+	11
8	M004	石津 元崇	山口	西京高等学校	2年	22+	4

女子							
順位	BIB	氏名	所属		学年	高度	予選
1	W003	永嶋美智華	静岡	静岡西高等学校	1年	39+	8
2	W077	竹内 亜衣	千葉	千葉市立千葉高等学校	2年	39	1
3	W088	小倉 紗奈	奈良	国際高等学校	3年	37+	8
4	W008	大澤 梅花	埼玉	川口高等学校	3年	35+	3
5	W027	高尾 知那	愛知	猿投農林高等学校	3年	34+	1
6	W043	抜井 美緒	奈良	香芝高等学校	1年	34+	8
7	W011	長谷川 颯香	東京	世田谷総合高校	1年	34+	15
8	W031	萩原 香月	千葉	船橋東高等学校	1年	28+	6

男子は、高度28～31で停滞するなか、予選5位の松岡玲央が32+まで伸ばす。その後に予選1位の上村悠樹、和田樹怜が迫るが1手差で松岡が優勝を手にする。

女子は、昨年の谷井が抜け接戦の状況と思えたが、ここに来て伸びてきている1年生の永嶋美智華が39+で優勝。予選8位からの逆転。ユースの国内リード選手権優勝、世界ユースボルダリング2位の實力を示す。

また、団体順位では、男子は山口県の西京高校が、女子は三重県の鈴鹿高校が優勝した。



★大会副委員長 佐橋 秀男

(全国高等学校体育連盟登山専門部事務局長)

高校生の大会がインターハイをはじめいろいろなスポーツ大会において、制限のある中で実施されております。この第13回全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会も昨年度より緩和され、さらに3年ぶりの学校対抗戦も再開し、参加総数が男女あわせて200名近くとなる大会になりました。大会開催に際し、会場の加須市、加須市山岳連盟、埼玉県山岳・スポーツクライミング協会、日本山岳・スポーツクライミング協会、全国高等学校体育連盟、各都道府県登山専門部顧問の皆様の協力のおかげで無事大会を終えることができましたこと厚くお礼申し上げます。

今年もいろいろなドラマを見ることができ、大変うれしく感じております。高校生が活躍する場所を維持・確保することは、とても大変なことだと夏のインターハイと両方に関わっている立場としてつくづく感じております。だからこそ多様性を認め、ともに協力し合うことの大切さを生徒に伝えていきたいと思っております。

★セッター：尾形 和俊

昨年より気温が高く比較的セットはやりやすく、ベテランの三人(木村、浅田、尾形)と若手の二人(尾崎、松浦)で、クリスマスソングを聞きながら大会4日前からセットを実施。

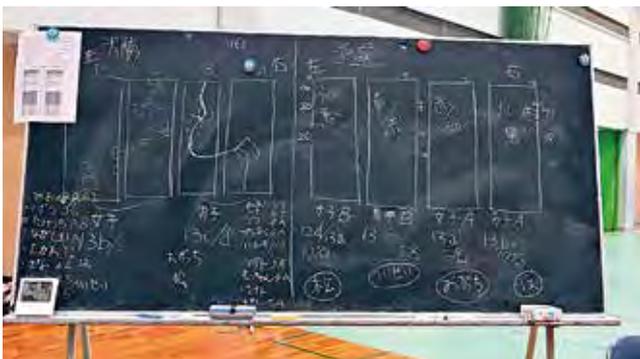
昨年に続き、準決勝がなく男子100名、女子90名の予選から、26名が決勝に進出となるため、予選では2本のルートタイプが異なり、どちらかのルートで良い順位が取れるチャンスがあるようにセットした。

今回も、たくさんのホールドを協賛して頂いており、決勝ではすべての会社のホールドを使用しました。

このようにたくさんの協賛を頂くことで大会は運営されており、我々セッターとしては協賛して頂いた会社へ還元できるよう、協賛ホールドを多くの人に目にしてもらえるようにしていきたい。

男子決勝

序盤は足場が不安定で緊張感が続き、壁を渡ってからの中間部では小さいホールドが続き指の力を使い、強傾斜に入ってからは一歩一歩の距離がありダイナミックで指と体の力が必要とされるルート。



女子決勝

序盤から大きいボリュームが続き体の力を吸われながら、足場が悪い中間部ではバランスが悪い状態が続き、強傾斜に入ってからにはパワフルで最終面まで持久力が試されるルート。

大会に参加された選手、保護者、引率の方々、大会運営に携われた大会関係者、役員、中継、審判、ビレイヤーの方々、お疲れさまでした。ホールドを協賛いただいた会社様、ありがとうございました。

★チーフセッター木村伸介

12月24、25日に第13回全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会が今年も埼玉県加須市民体育館で開催されました。

コロナ禍での開催となりましたが全国各地から男子99名、女子91名のエントリーがあり2日間の白熱した戦いが繰り広げられました。

昨年に引き続き準決勝がなくなり26名での決勝戦。予選は部活で取り組んでいるレベルの生徒からワールドカップで戦う選手まで参加しているので、安全面には特に気を付けて課題作成を行いました。また26名から優勝者を決めるにはどうしても手数が必要となり男女とも2面をトラバースしながら蛇行する「壁渡し」が行われました。

大会中は指先がかじかみ実力を発揮できなかった選手も見られましたが、有力選手はほぼ取りこぼしなく決勝戦に進みました。男子は中間部に強烈なムーブがあり多くの選手がその部分を突破できない中、兵庫の松岡玲央が安定した登りで切り抜けそのまま最終面まで到達して初優勝。女子はユース大会での優勝経験もあり昨年のワールドユースでも好成績を残している静岡の長嶋美智華が安定した強さを見せた。

今回も大会運営の中心を担って頂いた高体連関係者の皆様、役員、セッター陣そしていつも献身的に手伝って頂いている加須の皆様ありがとうございました。



2022山岳レスキュー講習会（積雪期・東部地区）報告

遭難対策委員長 服巻辰則



2023年1月27日（金）～29日（日）に群馬県水上町の土合山の家にて、山岳レスキュー講習会（積雪期・東部地区）を開催した。講習開催地の積雪の少なさを気にしていたが、講習直前から当日まで降雪が続き、講習には十分な積雪となった。

新型コロナ禍は落ち着いてきたものの、募集期間が新型コロナ第8波の時期に重なったためか、いずれのクラスでも定員割れとなり、講習会参加者数は、クラス1（受講生14名）、クラス2（受講生10名）、クラス3（4名）、講師・スタッフ等（17名）の計45名となった。

講習のクラス編成については全体構成を従来から見直し、雪崩による遭難の防止から捜索救助、ファーストエイド、搬送までを一貫して学べる内容とした。

クラス1は、特定非営利法人日本雪崩ネットワークと提携し、雪崩ネットワークのベーシックセーフティーキャンプに、A v S A R基礎（ビーコン捜索の基礎）を取り入れた登山者向けのプログラムとし、雪崩の基礎知識を学び雪崩被害に遭わないための学習を主とした。講師は、雪崩ネットワークの前理事長である五月女行徳氏を迎え、雪崩ネットワークの資格保持者である委員と共に講師を担当した。



クラス2は、雪崩事故発生直後の捜索救助とファーストエイドを主に取り扱い、登山医科学委員会の上小牧医師を迎えた低体温症・凍傷の講義を含み、雪崩埋没者の雪崩ビーコンを用いた捜索・救助、被災者への対応、安全地帯への搬送等を講習した。

クラス3は、一歩進んで傾斜地でのロープを使った搬送を主要なテーマとし、ビーコンによる捜索から掘り出し、被災者ケア、梱包、傾斜地の搬送を講習した。

宿泊は、指定宿舎と各自手配の宿舎でも選択可能であったが、今回参加者は全員指定宿舎への宿泊であったため、夜は講師を呼び出して質問・復習する姿もあり、充実した講習機会を提供できたものと思われる。



■クラス1・埼玉県 高橋 護

私が所属する団体から積雪期山岳レスキュー講習会の案内があった。雪崩に関する知識は希薄なので、すぐに参加意思を表明した。

日本雪崩ネットワークのオレンジブックを事前に一読するよう勧められ読んでみると、雪崩に関するノウハウは自分の想像を超えて難しいものであることが判ったが、予習したことで講習では理解を深めることができた。

講義はグループ討議や演習などが含まれており、その結果を根拠も含めて発表し、それに対する評価をいただくなど飽きることのない且つ理解がしやすいように工夫された構成だった。

また、コンプレッションテスト、層構造や雪質の観察等、書物では理解しにくい内容を実習を通じて学ぶことができた。複数埋没のビーコン捜索においてはリーダーを務めたが大変難しく、ビーコン操作も含めて反復練習が必要だと痛感した。本講習を受講したことで雪崩のリスク管理について具体的に知ることができ、雪崩に対する認識が大きく変化したと思う。

■クラス2・神奈川県 宮川和子

バックカントリーや冬季登山の経験はあれど、山岳会などに所属した事がない私は、いつかきちんと学ばなければいけないと言う思いから、この講習会に参加しました。

講義の総まとめとして最終日3日目は、積雪斜面での埋没者の捜索から要救助者を安全地帯まで搬送するという実際の雪崩現場を想定したフィールドワークでした。

幸運なことに私は、片方のチームリーダーをやらせていただきました。

自分が考える、自身のリーダーとしての働きの評価は散々でしたが、メンバーの方々から非常に多くの支えをいただき、チーム的にはある1点を除き、とても良い動きだったように感じました。

特に経験する事でしか気付けない事柄を「支えをもらう度に発見した」と言う点に於いて、この講習会は私にとって非常に有意義なものになりました。

受講したから終わり。ではなく、個人である以上、レベルアップは当然。今後も忘れないよう講習に再参加するなど、万が一に備えられるよう精進したいと思っています。

■クラス3・岩手県 鎌田 篤

今回JMSCAの山岳レスキュー講習会に参加して、経験豊富な講師の方々に知識・技術を学べたのは、自分だけではなく山に携わる人たちもお互いに助け合い、共に生命を守っていくのだという精神を感じることができました。参加者も冬季登山だけではなく、バックカントリーやアイスクライミングなど様々な形で山岳に関わっ

ており、意見交換でお互いに刺激を受けることができました。

講習内容については、クラス3では主に捜索、掘出し、梱包及び搬送の一連の技術を学習しました。1日かけた座学から実技指導という流れで、ただ要領を習得するだけでなく、何故この行動を取らなければならないかの根拠を指導していただき、大変有意義な講習会でした。

講習を受けて思ったことは、山岳救助は一つとして同じものはなく、応用を効かせていかなければ実災害に対応するのは難しいとも感じました。例えば「要救助者を引き揚げる際は倍力システムを組む」という固定観念を持ってしまうと救助活動が遅くなってしまいます。状況が許せば直引きでもいいのでは、という機転を養うことも大切と感じました。

そのためには自分でも沢山の経験と検証が必要だと思いました。また、講師の方々から、道具の扱いなどに目がいてしまい、本来の目的「人の生命を助けるということ」を忘れてはいけない」というご指導が一番印象深かったです。

今後、私を含め受講者の方々と共に山に携わる者として、今回受講した経験を活かし、「山を愉しむすべての人へ」安全・安心の一助になれば幸いです。ありがとうございました。

なお、本事業は、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成を受けて開催された。



Enjoy Climbing

【連載3】 横山勝丘 ベースキャンプへ

7月のイスラマバードは暑い！と思いきや、着いてみればこれまで三度の滞在と比べてもかなり涼しい。こここのところの豪雨で、気温も上がらないようだ。異常気象は世界中での懸案事項だけど、パキスタンも例外ではない。出発前から、パキスタンでは国土の1/3が水に浸かってしまった話などが舞い込んでいた。幸いと言ってしまえばダメなのだが、イスラマバード以北ではその影響は少なく、準備も首尾よく終わり、三日後にはスカルドゥ行きの飛行機に乗ることができた。

しかしスカルドゥでアクシデントが発生、私が風邪を引き、寝込んでしまう。この街で最終準備をして山に向かうはずが、それに何ひとつ参加できなくなってしまった。いつもなら、私は食料の購入などに対してかなり首を突っ込む。ガイドやコック任せにしていると、油が20リットルとか、砂糖が10キロとか、(私にしたら)まるで必要ないものばかり買ってくるし、私達のカツカツの予算のことも考えず、非常にストレスフルだからだ。しかしこれは私一人の特性のようで、他のメンバーは「え、いいじゃん」などとのたまう。だから、私は一人孤軍奮闘してコック達と戦う。私のこの態度はかなり面倒くさいものようで、他のメンバーは何ひとつ私に加勢してくれない。それがここ数年の遠征のルーティンにさえなっていたのだけれど、今回それができないのが心苦しい。もちろん遠征に慣れた他のメンバーなので、準備に困ることはないし、もしかしたら「あいついなくて楽だな」なんて言われていたかもしれない。比較的短時間で準備を終えて彼らはホテルに戻ってきたが、私はその購入内容を確認するほどの元気もない。まあすでに準備は終わってしまっている。今回ばかりは彼らにすべてを託そう。後から文句をつけるのも止めよう。そう思えるほど弱り切っていた。2日間寝て、咳は残ったけど熱は下がったので、最後の村となるフーシェヘジープで移動した。

翌日からボルダリングを楽しみながらの2日間のキャラバンが始まった。チャラクサ氷河の良いところは、この気楽さとアクセスの良さにある。私にとって、これが3度目のチャラクサ訪問だが、簡単な2日のアプローチで7000メートル近い山にトライできるのは、時間の限られた人間には最適の場所だが、その分手垢にまみれて



その辺に転がる石ころを登りながらのキャラバン。これもチャラクサ氷河の楽しみのひとつ。撮影横山

いるのも事実だ。人の訪れない未知の世界に足を踏み入れる喜びも、もちろん知っている。だけど、やらなければならないとさえ思える最高のプロジェクトがここには転がっていることもまた事実。

今回は未登のK7中央峰を目指してこの地を訪れていたが、同時期にアメリカチームが同じ目標で既にベースキャンプ入りをしていることも知っていた。その事実は、どうしてもレースという様相を帯びてくるし、彼らはすでにトライを開始している模様。出遅れた感は否めない。真新しい誰かのトレースを辿ることは本望ではなかった。また、私達が計画していた中央峰へのライン取りは、危ういガリーを標高差にして1500メートルほど登らなければならなかった(彼らは全く逆の面からトライしていた)。ここ数日、周囲のガリーからはことごとく轟音が響いている。計画通りに行動するのはいささかりリスクが高すぎた。

ベースキャンプには、未登の主峰南西稜をトライしにきていたイギリスチームもいた。残念ながら彼らは取付からわずか3ピッチの場所で落石に遭い、敗退していた。彼らがしきりに同ルートのトライを勧めてきたこともあったが、南西稜はかねてより気にかけていたライン。本来の目標の中央峰と比較して、主峰南西稜は基本的にリッジを辿るので危険性は低いと思えた。鳴海と話し合い、すんなりとルート変更が決定した。

しかしベースキャンプ入りしてすぐに、私達に与えられたベースキャンプでの時間は19日間しかないことが判明した。予定より一週間以上も短い。翌日から急いで高所順応を始めたが、結局、4日間かけて標高5900メートルまで到達しただけで終わった。正直もう少し順応したかったが、元々この地域は急峻な山ばかりで、順応は難しい。また、標高6000メートル級であれば2人ともこの程度の順応でもなんとかなるとの経験則と、残りのベースキャンプ滞在日数を鑑みて、これで納得させることに決めた。

安定しない天気をやり過ごし、順応から4日後に下部岩壁の6ピッチをフィックス。標高も低いので、比較的ロッククライミングそのものを楽しめる貴重な時間だ。

これまで南西稜をトライしたチームは、もれなく下部はリッジ左の簡単な斜面からガリーを登って中間部から南西稜に合流していたが、それでは本当に「南西稜を登った!」とはならない、というのが私達の見解だった。だってそれじゃあ、K7を初登した東大隊と何が違うんだ?東大隊のラインも、南西稜の南側のガリーから登り始め、上部で南西稜に合流する。どこからリッジに上が

るかの違いに過ぎないではないか。現代の技術や装備をもってすれば、「シットスタート」は絶対条件とさえ言えた。

「いよいよ」と思えないほどにあたふたどこまでやってきてしまったが、2019年の事故から考えたら、南西稜に向かう朝はその言葉がシックリきた。しばらく山から遠ざかっていたことによって、山に来ることそのものに恐怖を抱いてしまう時期もあったけど、賽が投げられれば、あとは必死こいて登って降りてくるだけ。この朝を迎えられたことに感謝!

愛媛県山岳・SC連盟自然保護委員会のSDGsな活動

西日本最高峰石鎚山の頂に立つと、眼下に島々の浮かぶ瀬戸内海、南には陽光に輝く土佐湾。西には国東半島を望み、大気の状態がよければ北方に伯耆大山の頂が小さく見えることもあります。四国はちっぽけな島なのだと思知らされるのですが、自然豊かな石鎚山系は季節を問わず県内外より多くの人々が訪れています。

海拔1700m以上には亜寒帯性の植生を代表するシコクシラベの森が分布していますが、生育地全体が笹の侵入で狭められる傾向にあり、また長期的には温暖化による競争力の低下が懸念され、愛媛県レッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されています。また、年間10万人を超す登山者による環境への最大の負荷はトイレ問題であり、自然放流式トイレの利用増加や登山者が登山道を外れて用を足すことによる汚染、踏み荒らし等による周辺環境の悪化を抑制することが喫緊の課題となっていました。

有志で開催した「フォレストミーティング2009「千年の森に集う」全国大会 in 石鎚」の分科会でこの問題を取り上げ、早速「石鎚山トイレ問題検討委員会」を立ち上げ検討を始めました。また、石鎚山のトイレ問題を検討している愛媛県自然保護課とも協働していくことになりました。そして、「石鎚山クリーンアップ推進連絡会」が、西条市・久万高原町・石鎚神社なども加わってスタートし、現状の把握とともに、建設場所やトイレのタイプの検討、マナー向上のための啓発活動などが推進されました。資金面で大きな壁が立ちだか中、「今何ができるか」と携帯トイレの実証実験を行うなど試行錯誤を続けながら、2014(平成26)年11月20日、愛媛県によって石鎚山頂下の二の鎖小屋に設置された環境配慮型トイレがオープンしました。土壌処理方式が採用され、維持管理のために利用者は1回あたり100円の協

力金またはクーポン券を投入するようになっています。併せて石鎚山環境保全応援団を毎年募集して「日本一美しい山のトイレ」を目指して維持管理を推進しています。

とはいえ、登山者に対する啓発活動は継続して必要です。毎年、山の日と秋に県の自然保護課と啓発登山を実施し、石鎚の豊かな自然を紹介しつつ、それを維持していくために携帯トイレの携行や登山口トイレの使用励行など、登山の基本的なマナーを参加者に伝えています。特に山の日には親子登山として開催し、当連盟のメンバーが山の魅力を子どもたちに伝える機会としています。人と人がつながることで、未来に続く環境保全のネットワークを広げています。

(愛媛県山岳・SC連盟副理事長 森岡郁雄)



学芸員による説明



山の日啓発登山

JMSCAで初めてのオリンピックでメダリストを育成した指導者表彰

公認スポーツ指導者に関して、顕著な功績のあった方に対して第2号の基準により令和4年11月23日、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者全国研修会において表彰されました。

●表彰の基準 第2号

公認スポーツ指導者として競技力の向上に尽力し、前年度に開催されたオリンピック競技大会、アジア競技大会又はこれに準じる国際大会において、優秀な成績をあげた選手を育成指導された方。

JMSCAでは毎年永年表彰として山岳の指導者に表彰者を出しておりましたが、スポーツクライミングでの育成指導としての表彰は初めてと事となります。皆様、大変におめでとうございます。(スポーツクライミング指導委員長 藤江理枝)



篠崎喜信
コーチ4



安井博志
コーチ4



伊東秀和
フィットネストレーナー



4. 新規登録データに対する遭対専門家による講評 (1)大阪府 村上隆志

21年の大阪府における山岳事故についてであるが、件数は6件と20年の12件から半減した。これは新型コロナの蔓延による自粛の影響と事故調査グループからのjROの辞退の2つの影響があると考えられる。jROはJMSCA、労山とは異なる山岳保険対応の団体であり正しい山岳事故の分析のためにも再度の復帰を願っている。

6件の報告のうち、すべてが60代、70代の登山者で、また内容もクライミング中の雪彦山の事故を除けば、全てがハイキング、縦走中の事故である。特に下りにおける転倒、それによる骨折、捻挫等が多く加齢による運動能力の低下が主要な原因と考えられる。

新型コロナの影響で自粛生活も2年以上になり運動不足による筋低下も大きいと推測できる。

高齢者の筋力(特に脚力)増加は厳しいと思われるが、山登りをする以上、少なくとも筋力維持のためにもトレーニングを継続することが最低限必要であり、訴えかけていきたい。

(2)群馬県 町田幸男

『2021年度群馬県内での遭難事故発生状況』

遭難件数は3年ぶりに100件を超え、全国順位は7位と

過去最悪となった。山域順では谷川岳、尾瀬、妙義山、赤城山と、人気の山域に遭難が集中している(表8)。

事故の態様は半数が転倒滑落で、道迷いは20%と全国の傾向とは異なる。谷川岳では一ノ倉での登攀事故は2件のみで、事故のほとんどが天神ロープウェイを利用した登山である。妙義山では日帰りで岩稜のスリルを味わえる山として人気上昇、単独登山者の転落事故が増加している(図20)。

また、榛名山、赤城山など軽装で手軽に登れるレジャー登山での事故が増している。車道から15分ほどの登山道で転倒し、救助を要請した事例もある。

これらの事故傾向を見ると、まさしくコロナ禍による登山スタイルの変化と言えるだろう。

表8 群馬県遭難状況

	発生件数	遭難者数					合計
		死亡	行方不明	虫傷	軽傷	重症なし	
令和3年	115	11	0	22	48	52	133
令和2年	85	8	1	22	25	51	107
前年比	30	3	-1	0	23	1	26

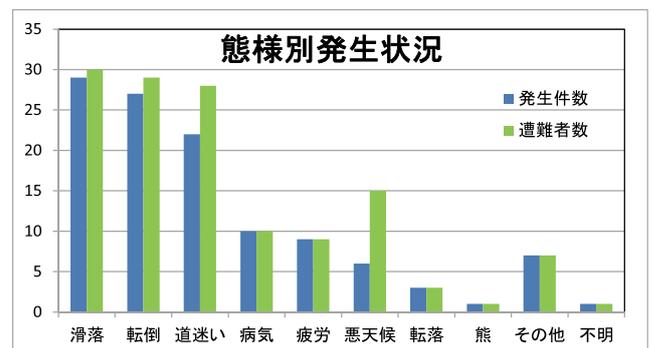


図20 態様から見た群馬県事故発生状況

数値から見た事故の傾向は以下の通りである。

- ①遭難者の80%が中高年、うち45%が60歳以上、
- ②72%が県外登山者で、うち東京埼玉が45%を占める。
- ③パーティー構成は単独登山が40%、
- ④計画書が提出されたは27%のみ、
- ⑤登山未経験が17%、経験10年未満が56%。

5. 新規登録者が経験した一瞬の事故分析の難しさ

残念なことに、今回229人の事故報告の中に、安全登山に取り組んできた事故対策の専門仲間I氏が記録された。幸い、大げかにもかからず、生き残り、奇跡的に登山に復帰するまで回復した。氏の好意により、事故の有様を紹介し、瞬時に起こる事故の分析方法を模索した。

一般に、転倒、滑落、墜落、多くの事故は、発生から終了まで非常に短い時間で完結する場合が多い。事故の原因判定は、事故後、発生した場所の形状、移動距離から状況を推定するが、事故の起因や体の動きについては殆ど分からない。

I氏の場合も、2人パーティで、4ピッチ目をリード中に、チムニークラックを抜けた緩斜面で、ランニングビレイピンが抜けたのか事故が発生した。しかし、解離性健忘のためか、事故の記憶はない。また、パートナーからは死角の位置にあった。そのため、事故直前の動作、姿勢、思考状態が分からない。表9に事故概要をまとめた。

ここで唯一、事故の内容を推定する貴重な情報は、表(赤枠)に示すように、体に刻まれた詳細な診断名と傷害部位である。「曖昧な推定」であるが、この情報から、事故時の体の動きを追ってみた。

表9	
[ID4404], 男 60代, P, [] 11時0分, IIC=4	
[目的], [発生地点] [] ノーマルルート, 3/4	
[診断] 外傷性クモ膜下出血/第2頸椎右横突起骨折/第3頸椎椎体骨折/第4頸椎棘突骨折/右横骨動脈損傷/後頭頭頸部血腫/左外傷性気胸/左第6・9肋骨骨折/前縦隔血腫/左眼硝子体出血	
[類型] 外傷=打撲/絞傷/大出血/骨折, 環境=その他, 左眼硝子体出血	
[部位] 首左/首右/胸左/胸右/肩左/肩右/頸椎/胸椎/上腕左/肘左/前腕左/手の平左/大腿左/下腿左 [既往症]なし	左前頭/左目
[リスク対応], [日帰り], ルート経路長く登つたルート登/長く登つたルート登, 登山道幅の出し	
[経歴] 登山(50年), クライミング(50年), 冬山(50年)	
[天候] 快晴, 微風, 20度	
[場所の状況] /コース外=岩壁/岩=固い岩/岩形状=フェイス, 急斜面(60~70度), 登り	
[事前問題], [日程の消化]予定通り [懸懐]墜落, [原因動作]バランスが崩れる,	
[原因詳細] 記憶になし [状態]4ピッチ目をリード中	
[問題]事故時点での記憶がないので分析できず	
[事故後]意識=呼びよさえる, 運動能力=少しだけ動ける	
[救出処置]処置者=プロガイド/短絡消防レスキュー, 処置法=止血/消毒/添え木あて首/体位変換/洗浄, 連絡法=携帯電話, 救出=ヘリコプター	
[行程]5/30午前7時頃より [] ノーマルルート下部にてクライミング技術の練習後午前9時頃より登山開始	

衝突時、体の動きの推定

「墜落したときの体の動きは、体の左側の損傷が多く、手の指などに損傷がないので、防御姿勢が取れず、体の左側面を下に、衝突したと推測される。



この際、足側の損傷が少ないことから、左上体部が僅かに足より下側に傾いていたのかもしれない。頭部はヘルメットで守られたが、左前頭部が損傷を受け、くも膜下出血が発生した。同時に、首に負荷がかかって、第2~4頸椎が大きく損傷した。

合わせて、体の真横左側から少し

背面方向に衝突、胸部を打撲した結果、肋骨骨折、気胸となった」と推定される」。

以上

このような推定事例を紹介するのは、I氏のケースだけでなく、膨大な事故者の診断や損傷部位のデータ(図25~32)が十分に活用できていないと考え、事故メカニズムの分析に生かす技術の開発を望むからである。

例えば、危険体感の人体ダミーなどを使って、転倒、滑落の実験による傷害部位から、より詳細なメカニズムが掴めるようになれば、安全登山に大きく貢献すると考えている(図21)。I氏の事故の教訓を生かしたい。



全4436人事故データを利用した分析

1. 事故マップと高度別事故分布に見る特徴

事故データN=4436は、図22のように、アルプス、都市周辺山域にクラスターが見られるが、良く分散し、ほぼ海岸線に近い山域から平野部の山まで分散する結果、併記した日本列島の地形図に類似した形状を描く。

一方、事故が発生し時点での高度は図23の分布曲線を描く。低<1000m<中<2000m<高とすれば、それぞれ低山域で43%、中山域で38%、高山域で19%の分布となる。

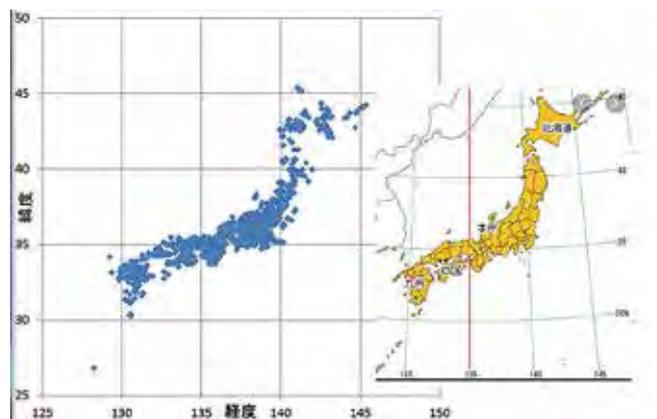


図22 日本地図と事故データの分散性 N=4436



2. 事故発生時のIIC(障害程度)

約20年間、事故が発生した時点での年齢に対する障害程度をUIAAのIIC(7段階)で分類し表10に表した。

表中の黄色は各IICにおけるピークを示す。

重症～死亡においては60歳前半、軽症～中症では後半となっている。最新の情報(表4)は70歳前半であるが、全体のピークを変化させるまでは発生していない。クライミング系に多い即死は50歳前半にピークをもつ。

なお、IIC=5,6のクラスター山域を図24に示す

表10 各年齢層におけるIIC分類結果

年齢	IIC Injury and Illness Classification <UIAA>						
	0無症	1軽症	2中症	3重症	4重症	5死亡	6即死
6-10		1					
11-15			1				
16-20		1	4	2	4		
21-25			5	8	5		1
26-30		6	10	22	7	3	3
31-35		20	21	55	15	3	4
36-40		27	35	63	17	3	3
41-45	1	44	36	95	18	3	6
46-50	3	41	73	124	36	8	7
51-55	4	63	95	221	47	9	12
56-60	2	88	135	340	71	11	10
61-65	2	152	186	423	112	13	8
66-70	1	174	193	395	94	12	11
71-75	1	95	113	196	53	4	5
76-80		42	53	63	22	3	3
81-85		4	7	10	2	1	
86-90		1	1				
不明		20		1	1	3	
総計	14	779	968	2018	504	76	73

事故発生時点での年齢層とIICとの関係



図24 死者発生した山域
アルプスと都市部周辺の山域に集中していることがわかる。

3. 各事故原因

警察の報告する事故態様は1要因だけであるが、実際に

単一要因は少ない。表11も同じである。各事故要因に於けるIICと要因との関係を求めた。

その典型的な複合型は「道迷い」である。登山グループで報告される道迷いは死亡率が非常に高いが、疲労+道迷い+滑落と複合化したものである。

一方、一要因の死亡率は総数が少ない場合、有毒ガスのように100%と突出する。非常に恐ろしい落雷も、総数は低い、意外と助かる事例も多い。

表11 各事故原因に対するIICと重体・死亡率

	0無症	1軽症	2中症	3重症	4重体	5死亡	6即死	総計	重体・死亡率	死亡率
滑落	0	130	172	415	131	31	47	826	22.6	8.4
転倒		348	491	1126	280	8	8	2245	12.3	0.7
墜落		29	53	133	40	6	6	267	19.5	4.5
道迷い	14	53	18	28	16	10	6	145	22.1	11.0
疲労		58	48	80	21	3	3	223	12.1	2.7
突防		15	7	14	5	4	6	51	29.4	19.6
落石		17	27	47	14	1	2	108	15.7	2.9
雪崩		6	1	4	2	5	6	24	54.2	45.8
落雷		2	1	3			1	7	14.3	14.3
悪天候		31	7	10	8	8	3	67	28.4	16.4
有毒ガス						1	1	2	100.0	100.0
凍死			1		1		3	5	80.0	60.0
動物・昆虫		29	29	8	1	2	1	70	5.7	4.3
不明		6	12	19	5	5	2	49	24.5	14.3
その他		89	122	216	51	4	4	467	12.1	1.8

注)事故原因は同一事故で複数要因、複合型が多い

傷害部位から見た事故の特徴

目撃情報など、情報が少ない傷害事故の状況を分析するには、主に診断、傷害部位の2方向から分析が有効と考えられる。しかし、ここでは、診断名が複雑でまとまりがつきにくいいため、傷害部位から一方向での分析とした。

1. 「滑落」、「転倒」、「墜落」とは

代表的な山岳事故原因に、「滑落」、「転倒」、「墜落」などがあるが、その用語は定義が曖昧なため、事故の関係者も適当に解釈して用いてきた。

特に「滑落」は、山岳用語集に、氷雪上を滑り落ちる事故とされているが、一般理解は、単に斜面上を落下すれば「滑落」と解釈し、用いられてきた。この際、滑り落ちるのか、転がり落ちるのか、岩角に当たりはね飛ばされるのかは問われない。

なお、類似語に「転落」がある。何かに接しながら落下する、あるいは真下に落ちる場合である。滑落と合成して、「転・滑落」と呼んだ時もあった。警察の態様報告では岩壁に触れながらも真下に落下する意味に用いられているが、定義されたものではない。なお、「墜落」の定義も類似し、何かに触れ落下するか、自由落下すると解釈される。

一方、「転倒」は、滑って/つまづいて後、倒れる動作である。転倒も倒れ、停止するまで、ある程度の距離を転がるか、滑って移動する。斜面上の移動ではないだけで、どの程度の移動距離かは曖昧な解釈となる。

表11から分かるように、滑落と転倒では死亡率が大きく異なる。何故、このような差が生まれるのか、事故時、どのような動作で傷害を得たのか、傷害部位の記録から検討した。

2. 傷害部位から見た「転倒」の特徴

「転倒」は当データベースで最大の2245件を記録する事故要因である。

傷害部位を図25にレーダーチャートで表す。なお、傷害部位は左右別に記録されているが、図中の項目が重なり、見易さから合成した。

「転倒」の大きな特徴を順位で見ると、足首と手首の傷害が突出しており、続いて膝が続くことである。いずれもジョイント部で発生している。続いて、肩、胸、ひたい、上腕、前腕と続くが、割合の高い傷害部位の数が後述する滑落と比べ少ない。

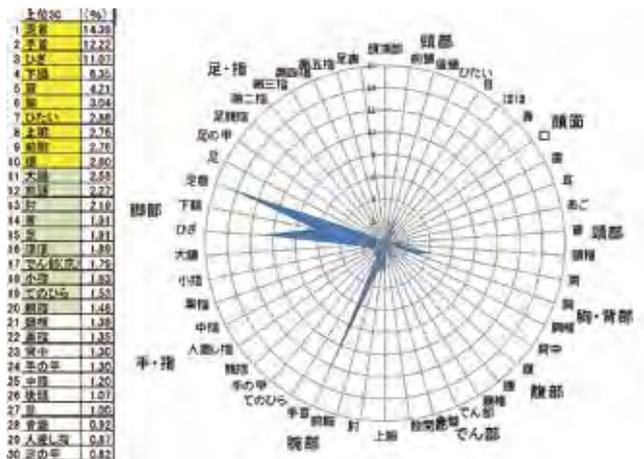


図25 転倒による傷害部位

これらの結果から事故時の動きを推測すると、

事故時、手足を動かすことで防御姿勢をとろうとしたと推測される。表中の順位、5肩、6胸7ひたいと続き、背中がないことは、前側に転倒していったのであろう。また、手首の損傷は、手で防ぐ防御動作をとるだけの時間があり、それなりの防御効果があったと考えられる。その結果、レーダー図の単純な分布形状から分かるように他の部位への影響が少なくなったと考えられる。

一方、図26に転倒時死亡した16人のデータを示す。図25の転倒のデータから抽出した。図より明らかなように、5位までは頭部、頸部に集中したことが死因になっている。

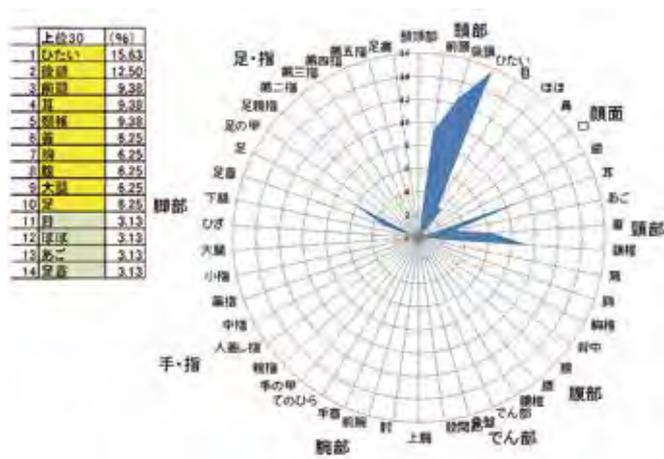


図26 転倒による死亡者の傷害部位

次回へ続く

寄贈図書

(一財) 全国山の日協議会	「山行手帖」No.757、No.758	会報	(株) 山と溪谷社	「山と溪谷」2月号 No.1060	雑誌
(公財) 健康・体づくり事業財団	「健康づくり」No. 537	会報	(株) 日本運動員新報社	「スポーツ産業新報」第2385号、第2386号	新聞
特定非営利活動法人 日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.92	情報誌	(公社) 日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.395	会報
(株) 日本運動員新報社	「スポーツ産業新報」第2384号	新聞	(公財) 日本スポーツ協会	「JSPOスポーツニュース」Vol.146、「JSPOフェアプレーニュース」Vol.146	会報
東京都山岳連盟	「とがくれん通信」2022年4月号	会報	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」No.364	会報
(株) ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.908	情報誌	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第499号	会報
中華民国山岳協会	「中華山岳」季刊 290	会報	日本山岳会	「山」No.932	会報
Corean Alpine Club	「산(山)」2022年12月号 Vol.276号	会報	日本山岳会	「YOUTH CLUB 山」No.13	会報
(公財) 日本スポーツ協会	「Sport Japan」vol.65	会報			

○日時：令和4年11月10日(木)
14:10～17:30

○場所：J S O S ビル3F会議室1と
Webのハイブリッド会議

○出席者：丸会長、亀山、小日向、古賀各副
会長、小野寺専務理事、村岡、相良、蛭田、
濱田、赤尾、町田各常務理事、前田、山本、
水村、栗田山口、六角、水島、野村、小竹、
安井、笹生、小高、原、望月、中橋各理事、
中島、古屋、佐久間各監事

○欠席者 青山理事、丸山理事

1. 開会

2. 丸会長挨拶

パンデミックの影響を受けて2年以上がたつ中、欧米諸国はコロナとの共生の下、経済復活しつつあるが、日本は、先進国の中で、累積成長率はマイナスのままで、経済的にまだ復活していない。2022年企業物価指数の変動幅は9.7%上昇、円高のなかで、今後どう生活に影響していくのか見極めながら、環境の変化を念頭に皆さんのご判断および活発な議論とJMSCAの成長を期待します。

3. 会議成立状況報告

理事数 28名中26名出席 監事数 3名中
3名出席(定款第33条、定足数=15名
(1/2以上))

4. 議長選出

丸会長が議長を務める。(定款第32条)

5. 議事録署名人

会長及び監事(定款第34条)

ホストは小野寺専務理事が務める。

6. 議題(注. 審議順に記載)

議案第1号 議事録の承認について

令和4年度第6回理事会議事録の承認について(事前送付済)

異議なく承認された。

議案第2号 2023年八王子WC開催の件について

村岡SC部長が、八王子以外の各会場(盛岡、伊賀、佐賀)で行った場合の良い点、悪い点の説明を行った。室内と室外の差があり、この中では、八王子で行なうこと(収入4310万円、支出4860万円、600万円弱赤字)が最善なのではないかという説明をした。

その後、質疑応答及びコメントが出たのうち、次年度はゴールドスポンサーが2件抜ける可能性がある。八王子W/Cで赤字となった場合に、特定資産3000万円を使用することと、協賛金も減ることを覚悟して、2023年八王子大会の開催をすることの採決を諮り、以下ようになった。賛成19名 棄権3名(古賀副会長、小野寺専務理事、水島理事)

反対2名(山口理事、赤尾事務局長)

2023年八王子WC大会を行うことに決定したが、協賛金の確保と、助成金の確保のための活動は今後引き続き行う。

議案第3号 令和4年度上期事業総括・決算報告、監事監査所見について

小野寺専務理事、相良常務理事が配布資料(上期事業総括、決算報告)を基に説明し、その後採決した。

賛成24人 棄権0人 反対0人

その後、各監事から以下の指摘があった。

*理事会の進め方(長時間かかり、提出資料が遅く、重要な事項の議論に十分な時間がとれない。)についての改善が必要。

*キャッシュフローがタイトにつき最新の注意を払うこと。

*SC業務については赤字体質が恒常的にならないような改善が必要。

*2023八王子大会を開催する上でのメリット、デメリットの議論が不足している。

議案第4号 役員選考規程の改訂について

山口理事が、ガバナンス委員会での検討結果を基に、配布資料について説明した。出席者から、いくつかの質疑応答の後、その他意見等があれば、事務局あてへ送付するように伝達した。

ガバナンス委員会で修正版を出してくることになった。

議案第5号 新春懇談会及び表彰について

2023年1月14日(土)に開催予定

(1)指導者表彰について

3名(山梨：辻敏夫、大阪：小畑和人、長野：中村和義)の表彰

(2)各岳連に対して、該当者がいるかどうかの推薦依頼を行うこと

(3)SC部優秀選手表彰(約10名くらい)について12月2日(金)までに推薦すること
上記3件を実施することについて、異議なく承認された。

議案第6号 (仮称)臨時理事/委員長/副委員長意見交換会について

現在39名参加予定、これに+アルファの方が参加予定。

SC委員会の委員長、副委員長にも、小日向副会長から声をかける。

議案第7号 令和5年度予算案策定について

11月末予算策定開始、部門別予算枠検討開始

12/15-1/10 各部門で検討する。

2月中旬：概算予算決定

3月初：理事会で決定

上記作業の過程で、2011年度実績、2022年度上期の実績も載せる予定

議案第8号 令和4年度自然保護委員会補正予算案について

小高理事から配布資料を基に説明した。登山部予算内で対応可能であり異議なく承認された。

反対0人 棄権0人 賛成24人

議案第9号 日本山岳グランプリについて

生涯を通じて山岳界で活躍、実績を出した人が対象となる。

過去2年コロナの影響もあり中止していたが、各岳連に募集のメールを出した。

議案第10号 UAAA(アジア山岳連盟)創立30周年記念大会

新潟県山岳協会内部でやりたいという希望を持っている。小野寺専務理事がUAAAに訪問した時に説明したい。

アジア山岳連盟の予算で行う。主管は、NFだが実働は新潟山岳協会。

異議なく承認された。

議案第11号 減遭難活動とJMSCAのPR企画(案)について

水島理事が配布資料を基に、減遭難活動のキャンペーン実施案を提案し、以下の予算確保の依頼をした。

2022年度補正予算：100万円

2023年度予算：144万円

上記は、登山部内財源で対応可能で、異議なく承認された。

議案第12回 JMSCA加盟団体振興推進PT進捗(中間報告)について

11月8日にPT内で報告会

12月理事会で提案予定

1月8,9日に詳細説明予定

7. 報告(注. 報告順に記載)

報告第1号 9月度月次報告 前述上期財務報告で説明済なので割愛

報告第2号 総会における監事の指摘事項について

前述監査報告を加えて対応する。

報告第4号 JMSCA認定競技強化センターの認定

JOCから承認されなかったのは通知済、JMSCA承認についてはJMSCAはその方向だが、方法等何も連絡はしていない。

報告第5号 日本スポーツ賞推薦

緒方良行選手 推薦となった。

報告第6号 UIAA総会報告について
アイスクライミング委員会は解散したが、大会は開催予定。

気候変動が主な議題だった。後日まとめて月報等にて報告予定。

報告第7号 コーチ(指導員)の認定について

常務理事会で承認された。

報告第9号 日山協共済会上期報告と決算について

小野寺専務理事が配布資料を基に説明した。

41,989人が今年度加入人数(昨年からは減っている)。

Web加入者は増えた。今月+400万円の委託金が支払われた。

外国選手の保険について、傷害保険で対応。今後検討が必要。

還付金の返金は、9月に終了せず、10月に実施している。

報告第10号 キャッシュフローについて

赤尾事務局長が、4000万円から8000万円まで追加借入れの予定だが、それでも、2023年2月には資金が不足する見込みと説明した。

JOCからの交付金が2-3000万円発生することもあるが、さらなる借入金の検討を継続する。

支出が予算以内に収まるように理事会に出席している費用管理者に依頼した。

以上
(令和4年11月10日) 記録 赤尾浩一

8月号より開始! かすみちゃんのハイキング日記



表紙のことば

昨年、国立登山研修所の『新・高みへのステップ』の編集に携わって知る事になったが、ヒマラヤ山脈は褶曲運動で形成されたのではなく、衝上断層が圧縮場でせり上がることで山脈の隆起が生じて形成されたとのこと。褶曲運動で山脈がつけられた事例はないそうだ。目から鱗であった。

エベレスト南西壁の8,500mには縞状にイエローバンドが走る。この下をトラバースして南峰ルンゼヘルートを延ばす。
(写真撮影 尾形好雄)

編集後記

最近スキー場管理外のバックカントリースキーの雪崩事故の報道をよく見ます。昔の山屋は、雪崩が起きやすい場所は、ある程度解っているのです。そこには踏みこまない。どうしても通らざるを得ない場合は、弱層チェックして安全を確認してなおかつ、一人づつ通過する。そうやって教わってきました。また、雪崩が起きやすい状況を肌で感じる動物的直感、ポッフ音や、しんしんと降る雪の降り方、急激な雪の積もり方や第六感が非常に重要です。日本人も外国人もみんな勉強して雪崩に合わないようにしましょう。
(蛭田伸一)

トレランJAPAN
一般社団法人 日本トレイルランニング協会

〒141-0031
品川区西五反田6-3-23-205
☎03-3492-0355 FAX 03-6451-3767

登山月報 第647号

定価 110円(送料別)
予約年間 1,300円(送料共)
昭和45年12月12日
第三種郵便物認可
(毎月1回15日発行)

発行日 令和5年2月15日
発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電話 03-5843-1631
FAX 03-5843-1635

山岳
雑誌

岳人

がくじん

山と人、時代をつなぐ「岳人」

3月号
発売中

【特集】九州・屋久島の山々

★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格990円(税込)



年間購読がおすすりめです

購読割引 送料無料 限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常価格12冊

年間購読なら12冊

1冊分
おトク!

~~10,800円(税込)~~ → **9,900円(税込)**
11,880円(税込) 10,890円(税込)

岳人 U.L.
ショルダー
バッグ

3色のうち1色をお届け。
※カラーはお選びいただけません。
軽量で丈夫な生地を使用。
登山中のサブバッグに!



限定
デザイン

岳人
カード

全国2,000カ所以上で
ご優待!



全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>
<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

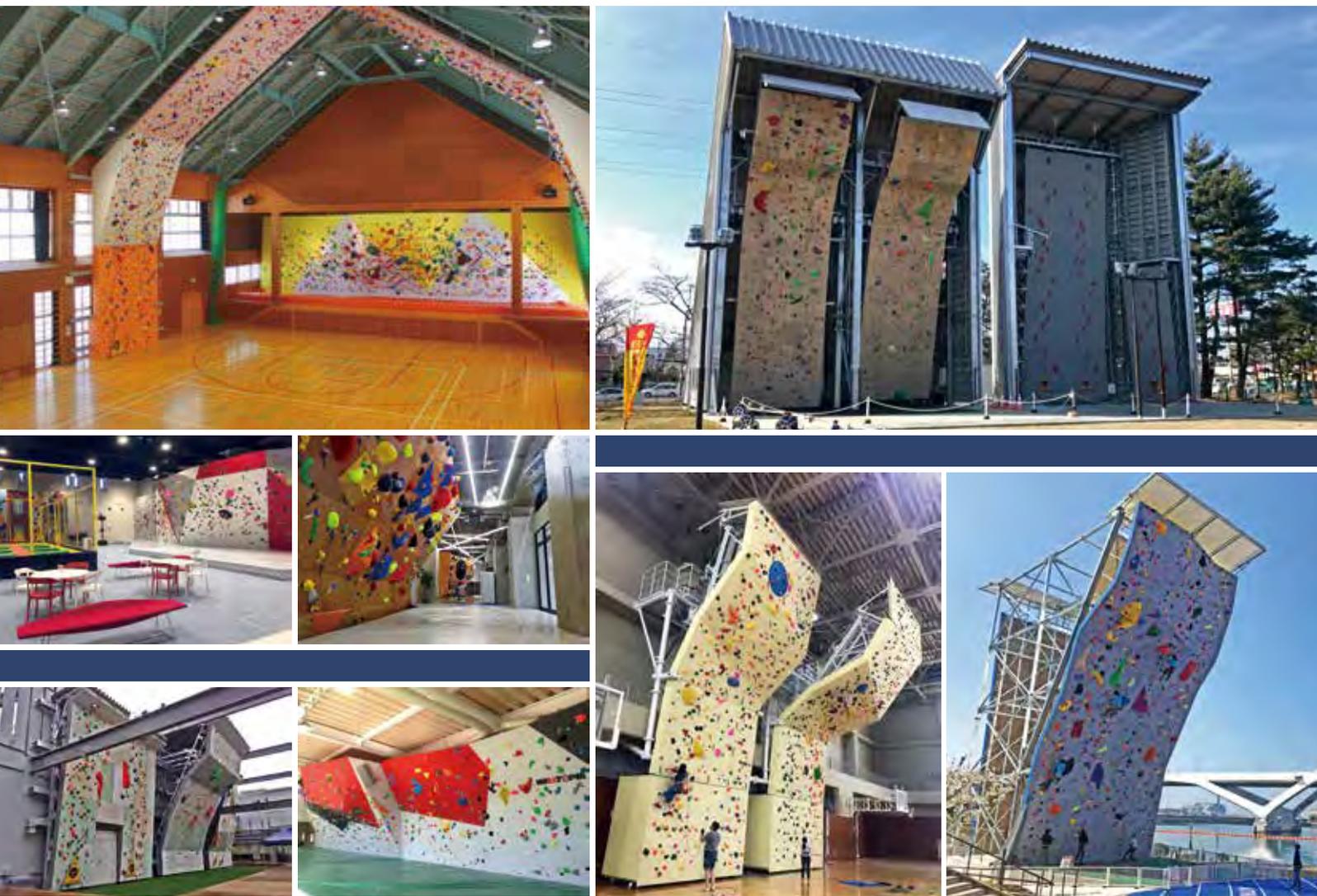
持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
12, 13, 14, 15	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギーの普及支援 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング 	1, 2, 3, 4, 5, 6	<ul style="list-style-type: none"> 健康づくりの支援 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応 	7, 8, 9, 10, 11	<ul style="list-style-type: none"> 次世代モビリティ社会への対応 (自動運転車等) 災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会*をめざします。

*外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



登山者のマナー 山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- 傷害死亡・後遺障害
- 遭難搜索費用
- 救援者費用
- 傷害入院
- 傷害通院
- 傷害手術
- 日常生活賠償

日山協 山岳共済会

〒170-0013東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
<https://sangakukyousai.jp>



「MAMoL マモル」
山を愛する人たちの共済会を～

WEBからもお申込みいただけます